

# 『枕草子』の香りと信仰

## ——櫛の香の尊き——

渡辺仁史

### 緒言

『枕草子』に描かれる事物の傾向を考える時、創作である『源氏物語』と比較するより、分野として慶事を主に描く日記文芸である『紫式部日記』と対照するのが妥当であろう。ここで取り上げる『枕草子』の香りは用例こそ多くはないが多様である。ただし、仏教的芳香は『枕草子』には少ない。香りの用例数にのみ注目すると清少納言は信仰に縁が薄く軽薄とも受けとめられかねない。実際は香りから敬虔な思いへの意識の連続がある。本稿では参籠の際に差し出された「櫛」の「香」の「尊き」という感想が描かれた挿話に着目し、『枕草子』の香りと信仰の接点のありようについて考察したい。

### 一

『枕草子』以前の香の表現に焦点を当てると『古今和歌集』<sup>(1)</sup>における香は

梅 1 4 例 桜 3 例 山吹 1 例 橘 2 例 女郎花 1 例 藤袴 2 例 移り香 1 例  
はくはかう 1 例

と花の香が中心であり、『古今和歌集』の香の規範からすれば『枕草子』の場合はおよそ異質である。時代をたどると天徳四年三月三十日内裏歌合には「沈ノ押物ノ花足」<sup>(2)</sup>が見える。また『蜻蛉日記』には「薰物」、「香(かう)」などの言葉が見られ、作り物語ではあるが『宇津保物語』がしばしば「沈」や「合はせ

薰物」に言及するように「香」の上流階層への普及が徐々に進んでいる様子が窺える。やがて薰香の世界に中流の女房達が参入する。

紫式部は『紫式部日記』<sup>(3)</sup>寛弘五年八月の条に

二十六日、御薰物あはせはてて、人々にもくばらせたまふ。まろがしあたる人々、あまたつどひあたり。

と記しており、女房などにも薰物が配られたことがわかる。九月九日には「ひと日の薰物とうでて試みさせ給ふ。」ともあるが、『紫式部日記』で香に言及する場面はこれらの例を含めて多くはないし、仏事とも関わりがない。以下に他の例を掲げる。

九日、菊の綿を、兵部のおもとの持て来て(九月九日)

沈]の懸盤・白銀の御皿など(九月十三日)

例の沈]の折敷・何くれの台なりけむかし。(十一月一日)

管一よろひに薰物入れて、心葉、梅の枝をして、いどみきこえたり。

(十一月二十日)

その夜さり、春宮の亮めして薰物たまふ。大きやかなる管一つに、高う入れさせ給へり。(十一月二十一日)

黒方をおしまろがして、ふつつかにしりさき切りて、白き紙一かさねに、立文にしたり。(五節)

沈の櫛・白銀の筭など、使の君の鬢かかせ給ふべきけしきをしたり。

(十一月二十八日)

植物の香から薫香への傾倒の途上に位置づけられる『枕草子』の香は多様である。一方で『枕草子』では『源氏物語』「若紫」巻の「名香」のようなものは焦点化されず、両者の間には最上層の艶麗と中流層の鮮明の印象の違いがある。ただし『源氏物語』の香りの場面描写は『宇津保物語』の叙述と同様に少なからず創作の可能性がある。なお、「名香」の記事は『小右記』長保元年十二月一日「名香盛御手」の記事が早いと考えられる。以下に『源氏物語』の「名香」の用例を掲げる。

げに、いと心ことによしありて、同じ木草をも植多なしたまへり。月もなきころなれば、遣水に篝ともし、燈籠などもまゐりたり。南面いときよげにしつらひたまへり。そらだきものいと心にくくかをり出で、名香の香など満ちたるに、君の御追風いとことなれば、内の人々も心づかひすべかめり。僧都、世の常なき御物語、後の世のことなど聞こえ知らせたまふ。わが罪のほど恐ろしう、あぢきなきことに心をしめて、生けるかぎりこれを思ひなやむべきなめり、まして後の世のいみじかるべき、思ひつづけて、かうやうなる住まひもせまほしうおぼえたまふものから、昼の面影心にかかりて恋しければ、

『源氏物語』「若紫」巻

御簾の内のけはひ、そこら集いさぶらふ人の衣の音なひ、しめやかにふるまひなして、うち身じろきつつ、悲しげさの慰めがたげに漏り聞こゆるけしき、ことわりにいみじと聞きたまふ。風はげしう吹きふぶきて、御簾の

内の匂ひ、いともの深き黒方にしみて、名香の煙もほのかなり。大将の御匂ひさへ薫りあひ、めでたく、極楽思ひやらるる夜のさまなり。

(賢木)巻

紫の上ぞ、いそぎせさせたまひける。(中略)名香には唐の百歩の衣香を焚きたまへり。阿弥陀仏、脇士の菩薩、おのおの白檀して造りたてまつりたる、こまかにうつくしげなり。闍伽の具は、例のきはやかに小さくて、青き、白き、紫の蓮をととのへて、荷葉の方を合はせたる名香、蜜をかくしほほろげて焚き匂はしたる、ひとつかをりに匂ひあひていとなつかし。

(鈴虫)巻

阿闍梨もここに参れり。名香の糸ひき乱りて、「かくても経ぬる」など、うち語らひたまふほどなりけり。

(総角)巻

御かたはらなる短き几帳を、仏の御方にさし隔てて、かりそめに添ひ伏したまへり。名香のいとかうばしく匂ひて、櫛のいとはなやかに薫れるけはひも、人よりはけに仏をも思ひきこえたまへる御心にてわづらはしく、墨染のいまさら、をりふし心焦られしたるやうにあはあはしく、思ひそめしに違ふべければ、かかる忌なからむほどに、この御心にも、さりともしこしたわみたまひなむなど、せめてのどかに思ひなしたまふ。秋の世のけはひは、かからぬ所だに、おのづからあはれ多かるを、まして峰の嵐も籬の虫も、心細げにのみ聞きわたさる。常なき世の御物語に時々さし答へたまへるさま、いと見どころ多くめやすし。

(総角)巻

最後の例は「櫛」が仏事に関わる例である。『小右記』万寿三年八月七日の条

の「名香」について、「沈香・丁子・白檀」は「名香」の主成分とも考えられるが、それが「名香」のすべてではなく、『源氏物語』のように「唐の百歩の衣香」や「蜜」の調合の仕方を工夫した「荷葉の方を合はせたる」ものもありうる。さらに高価という意味では「麝香」などは「雜香」には入れがたいのではなからうか。

また、「名香」の例を見てゆくと「常なき世」の認識、「後の世」への関心、「極楽思ひやらるる」雰囲気といった仏教的思惟への言及を伴っていることが特徴的である。「名香」は仏事に使用されるので当然でもあるが、時代の雰囲気は『枕草子』からは大きく変わりつつあるようである。

## 二

「名香」は仏事に密接に関わる香であるが、『枕草子』の香は『源氏物語』のようには薫物にこだわらない多様性、世俗の香の側に多くが位置づけられる特徴を持つように見える。確かに『源氏物語』では他の香とともに合されたように「名香」であるが『枕草子』では描かれない。しかしそれは『紫式部日記』でも同じであり、『枕草子』が仏事に深く関わろうとしないと考えるのは早計である。『枕草子』の「香」の用例を以下に掲げる。

### 『枕草子』の「香」の用例

九月九日は、暁方より雨すこし降りて、菊の露もこちたく、おほひたる綿なども、いたく濡れ、うつしの香ももてはやされたる。

(「正月一日、三月三日は」の章段7段)

心ときめきするもの。雀の子飼。ちこ遊ばする所の前わたる。よき薫物た

きて、ひとり臥したる。唐鏡のすこし暗き見たる。よき男の、車とどめて、案内し問はせたる。頭洗ひ、化粧じて、香ばしうしみたる衣など着たる。ことに見る人なき所にてても、心のうちは、なほいとをかし。待つ人などのある夜、雨の音、風の吹きゆるがすも、ふと驚かる。

(「心ときめきするもの」の章段26段)

かうの薄物の二藍の御直衣、二藍の織物の指貫、濃蘇枋の下の御袴に

(「小白川といふ所は」の章段32段)

香染めのひとへ、もして黄生絹のひとへ、紅のひとへ袴の腰のいと長やかに

(「七月ばかり、いみじう暑ければ」の章段33段)

香の紙のいみじうしめたる匂ひ、いとをかし。

(「七月ばかり、いみじう暑ければ」の章段33段)

節は、五月にしく月はなし。菖蒲、蓬などのかをりあひたる、いみじうをかし。

(「節は」の章段36段)

七月ばかりに、風いたう吹きて、雨など騒がしき日、おほかたいと涼しければ、扇もうち忘れたるに、汗の香すこしかかへたる綿衣の薄きをいとよくひき着て、昼寝したるこそ、をかしけれ。

(「七月ばかり」の章段41段)

鞞負の佐の夜行姿。狩衣姿も、いとあやしげなり。人に怖ぢらるる袍は、おどろおどろち。立ちさまよふも、見つけてあなづらはし。「嫌疑の者やある」と、たはぶれにも咎む。入りあて、そらだきものにしみたる几帳うち掛けたる袴など、いみじうたつきなし。

(「にげなきもの」の章段42段)

また、さて行くに、薫物の香、いみじうかかへたるこそ、いとをかしけれ。

(「ちごは」の章段56段)

櫛の枝を折りて持て来たるは、香などのいと尊きもをかし。

(「正月に寺に籠りたるは」の章段116段)

燈籠に火ともしたる、二間ばかりさりて、簾高う上げて、女房二人ばかり、童女など、長押に寄りかかり、また、下いたる簾に添ひて臥したるもあり。火取に火深う埋みて、心細げに匂はしたるも、いとのとやかに心にくし。

(「南ならずは、東の廂の板の」の章段186段)

薫物の香、いと心にくし。五月の長雨のころ、上の御局の小戸の簾に、斎信の中將の寄り居たまへりし香は、まことにをかしうもありしかな。そのものの香ともおぼえず、おほかた雨にもしめりて艶なるけしきの、珍しげなきことなれど、いかでか言はではあらむ。またの日まで御簾にしみかへりたりしを、若き人などの、世に知らず思へる、ことわりなりや。

(「心にくきもの」の章段192段)

蓬の、車に押しひしがれたりけるが、輪のまはりたるに、近ううちかかへたるも、をかし。

(「五月ばかりなどに、山里にありく、いとをかし。」の章段209段)

さやうなるに、牛の鞆の香の、なほあやしう嗅ぎ知らぬものなれど、をかしきこそ、もの狂ほしけれ。いと暗う、闇なるに、前にもしたる松明の煙の香の、車の内にかかへたるも、をかし。

(「いみじう暑きころ」の章段210段)

清水などにまゐりて、坂本のぼるほどに、柴焚く香の、いみじうあはれな

るこそ、をかしけれ。

(「清水などにまゐりて」の章段215段)

五月の菖蒲の、秋冬過ぐるまであるが、いみじう白み枯れてあやしきを、ひきをりあけたるに、そのをりの香の残りてかかへたる、いみじうをかし

(「五月の菖蒲の」の章段216段)

よくたきしめたる薫物の、昨日、一昨日、今日などは忘れたるに、ひきあけたるに、煙の残りたるは、ただ今の香よりもめでたし。

(「よくたきしめたる薫物の」の章段217段)

蟻を入れたるに、蜜の香を嗅ぎて、まことにいととく、あなたの口より出でにけり。

(「社は」の章段229段)

桜の唐衣、薄色の裳、濃き衣、香染、薄色の表着ども、いみじうなまめかし。

(「関白殿、二月二十一日に、法興院の積善寺といふ御堂にて」の章段263段)

狩衣は、香染の薄き。白き。ふくさ。赤色。松の葉色。青葉。桜。柳。また青き。藤。

(「狩衣は」の章段267段)

(傍線は香の種類を、二重傍線は香についての感想を、波線は「かかふう」「たきしめ」「しめ」等の様態を表す。)

『枕草子』では「香」「かかへ」「をかし」という思惟の連鎖には道にただよう「薫物」が一例、その他四例(「汗の香」、「蓬」、「松明の煙の香」、「五月の菖

蒲)が教えられる。もう一つの思惟の連鎖として「薰物」「そらだきもの」「薰物の香」は先の一例を除いて室内で「たく」、「しむ」、「たきしめ」、「匂はす」ことで「心ときめきするもの」「心にくし」「めでたし」「なまめかし」などと結びつく。中宮定子に関わる仏事と「名香」などにももちろん筆は向かわないし、単に『枕草子』に供養など仏事がそれほど描かれないうより、芳香によって「極楽」を思い合わせるなどではなく、あえて多様な香を求めて日常の中を訪ねまわる、室内的というより外光のもとに乗り出してゆく姿勢を見て取ることができる。

『枕草子』でも仏教的な香を表しているのは「櫛」である。「櫛」の「香」がさらに「尊し」と表現されていることに注目したい。『源氏物語』『総角』巻でも「櫛」と仏事がかかわっていた。「尊し」の語と仏事との関係が深いことを示すために「尊し」とその派生語の用例を掲げる。

#### 『枕草子』の「尊し」とその派生語の用例

説教の講師は、顔よき。講師の顔を、つとまもらへたるこそ、その説くことの尊ととさもおほゆれ。ひが目しつれば、ふと忘るるに、にくげなるは罪や得らむとおほゆ。このことは、とどむべし。すこし齢などのよろしきほどは、かやうの罪得がたのことは、書き出でけめ。今は罪いと恐ろし。また、尊きこと、道心多かり、とて、説教すといふ所ごとに、最初に行きゐるこそ、なほ、この罪の心には、いとさしもあらで、と見ゆれ。

#### (「説教の講師は」の章段30段)

もとめてもかかる蓮の露をおきて憂き世にまたは帰るものかはと書きてやりつ。まことに、いと尊くあはれなれば、やがてとまりぬべく

おぼゆるに、さうちうが家の人のもどかしさも忘れぬべし。

#### (「菩提といふ寺に」の章段31段)

すこし大人びたまへるは、青鈍の指貫、白き袴もいと涼しげなり。佐理の宰相なども皆若やぎだちて、すべて尊きことの限りにもあらず、をかしき見物なり。

#### (「小白川といふ所は」の章段32段)

「異物は食はで、ただ仏の御おろしをのみ食ふか。いと尊きことかな」と言ふけしきを見て「なか、異物もたべざらむ。それがさぶらはねばこそ、とり申しつれ」と言へば、くだもの、ひろき餅などを、物に入れて取らせたるに、むげに仲よくなりて、よろづのこと語る。

#### (「職の御曹司におはしますころ」の章段83段)

修法は、奈良方。仏の御しんどもなど、よみたてまつりたる、なまめかしう尊し。

#### (「修法は、奈良方」の章段122段)

法師などの、なにがしなど言ひてありくは、なにとかは見ゆる。経尊くよみ、みめきよげなるにつけても、女房にあなづられてなりかかりこそすめれ。僧都、僧正になりぬれば、仏のあらはれたまへるやうに、おぢまとひ、かしこまるさまは、なにか似たる。

#### (「位こそ、なほめでたきものはあれ」の章段181段)

手洗ひて、直衣ばかりうち着て、六の巻そらによむ、まことに尊きほどに、近き所なるべし。ありつる使、うちけしきはめば、ふとよみさして、返事に心移すこそ、罪得らむと、をかしけれ。

〔好き好きしくて独り住みする人の〕の章段184段)

ことはじまりて、一切経を蓮の花の赤き一花づつに入れて、僧俗、上達部、殿上人、地下、六位、なにくれまで、持て続きたる、いみじう尊し。導師まあり、講はじまりて、舞などす。

〔関白殿、二月二十一日に、法興院の積善寺といふ御堂にて〕の章段263段)

尊きこと。九条の錫杖。念仏の回向。

〔尊きこと〕の章段264段)

雨は、心もなきものと、思ひしみたればにや、片時降るもいとにくくぞある。やむことなきこと、おもしろかるべきこと、尊うめでたかべいことも、雨だに降れば、言ふかひなくくちをしきに、なにか、その濡れてかこち来たらむが、めでたからむ。交野の少将もどきたる落窪の少将などは、をか

し。

〔成信の中將は、入道兵部卿の宮の御子にて〕の章段277段) これらの例に見られるように『枕草子』の仏道への関心は見過ごせないものがある。特筆すべきは「尊し」の語が頻出する次の物語の章段である。

清水などに詣でて局するほどに、(中略)局に入るほど、居並みたる前を通りゆけば、いとうたてあるを、犬防のうち見入れたるここちぞ、いみじう尊く。なとてこの月ころ詣てて過しつらむと。まつ心もおこる。御みあかしの、常燈にはあらで、うちにまた、人のたてまつれるが、恐しきまで燃えたるに、仏のきらきらと見えたまへるは、いみじう尊きに、手ごとに文どもをささげて、札盤にかひろき誓ふも、さばかりゆすりみちたれば、とりはなちて聞きわくべきにもあらぬに、せめてしほりいでたる声々の、

さすがにまたまぎれずなむ。「千燈の御志は、なにがしの御ため」などは、はつかに聞ゆ。帯うちして、拝みたてまつるに、「ここに、つかうさぶらふ」とて、櫛の枝を折りて持て来たるは、香などのいと尊きもをか。誦經の鐘の音など、わがななり、と聞くも頼もしうおぼゆ。かたはらに、よろしき男の、いと忍びやかに額などつく立ち居のほども、心あらむと聞えたるが、いたう思ひ入りたるけしきにて、寝も寝ず行ふこそいとあはれなれ。うちやすむほどは、経を高うは聞えぬほどによみたるも、尊げなり。うちいでさせまほしきに、まいて、はななどを、けざやかに聞きにくくはあらで、忍びやかに、かみたるは、何ごとを思ふ人ならむ、かれをなさばやとこそおぼゆれ。(中略)夜一夜ののしり行ひ明すに、寝も入らざりつるを、後夜など果てて、すこしうち休みたる寝耳に、その寺の仏の御経を、いと荒々しう尊くうちいでよみたるにぞ、いとわざと尊くしもあらず、修行者だちたる奉仕の養うち着たるなどがよむななりと、ふとうちおどろかれて、あはれに聞ゆ。

〔正月に寺に籠りたるは〕の章段116段)

『枕草子』には「誦經は」(160段)「寺は」(197段)「経は」(198段)「仏は」(199段)「陀羅尼は」(202段)等の章段があり、清少納言が仏教に無知だったとは到底考えられない。ここは經典に依りつつ発心に至るというよりも一般的な物語ではあるが、「尊し」の頻出は参籠中見聞きするもの多きに敬虔な思いを抱き、日常を振り返り内省する信仰心を意味するのである。ここに描かれるのは「犬防」で囲われた内陣の炎に揺らめく仏の輝きの莊嚴さであり、かすかな声が呼び覚ます寺の内部空間の静寂さとの暗さでもあり、深遠さ、奥深さといった雰囲気でもある。見聞きするものそれぞれにつけ清少

納言が畏まる姿勢が非日常的な物語の場にふさわしい。

『枕草子』の仏教的な香は「櫛」に見られるだけであるが、『源氏物語』「総角」巻の「名香」と結びつく「櫛」の延長上にこの章段の「櫛」の「尊き」の用例をたどると信仰心に結びつく。それを示すものとして清少納言の日記を抱いている「罪の心」（説教の講師は）の章段30段）、罪障の深さの自覚がある。しかし、そこには「なほ」というためらいがあり、一方で年齢とともに深まる罪障感から「罪いと恐ろし」と述べながらも、慣習的な意味での信仰には必ずしもなじめない抵抗感も窺える。

### 結語

清少納言の信仰心が当時の一般の貴族女性と比較して格段に深いというわけではない。しかし、従来論じられてきたような意味で清少納言が日常見聞きする外界の景物・人事にのみ細やかな関心を抱いていただけではない。「櫛」の例に見られるように「香」に導かれ「尊き」存在を厳かに受け入れるような内面の深みと広がり清少納言が併せ持っていたことを確認しておきたい。「をかし」の美意識によって対象化されてはいるが、なお「櫛」の「香」の清新さは清少納言の心に染み入る「尊き」宗教的契機として記されたのであろう。

### 注

- (1) 小町谷照彦訳注『古今和歌集』筑摩書房 平成22・3
- (2) 萩谷朴他校注 日本古典文学大系『歌合集』岩波書店 昭和40・3
- (3) 中野幸一他校注・訳 新編日本古典文学全集26『和泉式部日記 紫

式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』小学館 平成6・9 以下、『紫式部日記』本文はすべて同書に拠る。

(4) 大日本古記録『小右記』二 岩波書店 昭和36・6 (峰岸明『平安時代記録語集』上下 吉川弘文館 平成28・8 の指摘に拠る。)

(5) 阿部秋生他校注・訳 日本古典文学全集『源氏物語』(1)〜(6) 小学館 昭和45・11〜51・2 以下、『源氏物語』本文はすべて同書に拠る。

(6) 最後の例にある「櫛」に注目すると次のような例も視野に入る。この個所にも「常なき世」への言及がある。

「常なき世」とは身ひとつにのみ知りはべりにしを、後れぬ、とのたまはせたるになむ、げに、

あま舟にいかがおもひおくれけんあかしの浦にいさりせし君  
回向には、あまねきかどにても、いかがは」とあり。濃き青鈍の紙にて、櫛にさしたまへる、例の事なれど、いたく過ぐしたる筆づかひ、なほ旧りがたくをかしげなり。(『若菜下』巻)

(7) 京楽真帆子「平安京貴族文化とにおい―芳香と悪臭の権力構造―」三田村雅子・河添房江編『薫りの源氏物語』翰林書房 平成20・4

(8) 石田穰二訳注 新版『枕草子』上・下巻 角川書店 昭54・8, 55, 4 以下、『枕草子』本文はすべて同書に拠る。

(9) 長沼英二が揺曳する「かかふ」芳香と浸透する「しむ」芳香としてすでに指摘している。「清少納言の嗅覚表現―内的陶醉と外界認識―」『二松学舎大学人文論叢』第45輯 平成2・10